

## 合唱の魅力

### ～サントリー1万人の第九に参加して～

第31回サントリー1万人の第九コンサートに参加した。参加は今年で2回目である。大阪城ホールの中央に指揮者とオーケストラが、フロアとスタンドには第九を歌う1万人の大合唱団が取り巻き、観客席は残りのフロアとスタンドの一角にあるだけ。1万人の大合唱団は出演者であり、観客でもある。

中央で指揮する佐渡裕さんの指揮棒を見て1万人が声をそろえる。指揮者のタクトが命である。大合唱団の歌声は、ホールの天井から降り注いでくる。体が震える瞬間でもある。

一部が始まる。ゲストの加山雄三さんの歌う「海 その愛」のバックコーラスとして1万人の第九男声合唱団が歌う。2曲目の「アメイジンググレイス」は、1万人の大合唱団のコーラスが歌手加山雄三を包みこむ。感動でうち震えている自分がある、しかし観客席へ歌声がどのように届いているかはわからない。残念だが後でDVDを確認するしかない。

二部のベートーベンの第九が始まる。佐渡裕さんは身体全体で指揮をする。タクトは生き物のように動く。時に激しく時にゆっくりと、時に波のように、時に演奏者に任せるように動きを止める。

第4楽章が来る。ソリストの動きと1万人の大合唱団が一斉に起立する。歌が始まる。佐渡さんの指揮は歌いやすい。背の高い佐渡さんが頭の上で指揮棒を振る。ホール全体の合唱団の誰もが指揮棒が見えるようにだ。歌の出だしにもはっきりしたサインをくれる。だから1万人であっても声がそろえるだろう。感動が倍加する。しかしこの感動は言葉では表現できない。体験するのが一番である。

サントリー1万人の第九に参加するには、抽選がある。しかも全12回の2時間練習に参加しないと行けない。うち3回欠席すると参加資格が取り消される。厳しい関門がある。厳しい関門だが、練習は楽しい。少しずつ慣れながら、10回目ぐらいには、全曲をクリアする。初心者は全曲を暗譜するのは至難であるが、先生は、「1万人もいるので知っているところだけ歌ってもいいよ。ただし口ばくで。そして笑顔でね。」と言ってくれる。ずいぶんと気が楽になること請け合いだ。だから楽しい。

練習の仕上げに佐渡裕さんの特別レッスンが組み込まれている。1000人～2000人を対象に指揮者の佐渡さんが直接指導してくれる。指導のポイントもわかりやすく、参加すれば合唱がもっと好きになれる、不思議な魔力を感じる。

演奏会前日の全体リハーサルと当日のリハーサルに参加しないと行けない。オーケストラやゲスト演奏者と音楽の表現を合わせる。しかしオーケストラの演奏やゲストの演奏な

ど余分に何回も聴けるのはとっても得した気分になる。音楽が作られていく過程に付き合えるのは合唱の魅力のひとつのように思う。

演奏会が終了したとき、やっと終わったと思う。長い練習が達成された喜びでもある。来年も出ようかなと思う瞬間でもある。この達成感が合唱の魅力かも知れない。

この感動も阪南メンネルコールで合唱に出会えたからこそ得られた経験です。合唱の魅力が少しずつではあるが、わかってきた感じがしている。



1万人の第九に参加した阪南メンネルコールの仲間



前日の全体リハーサルの会場風景

平成25年12月14日

男声合唱団 阪南メンネルコール

江川 猛